



# コミュニティ

community  
The New Apostolic Church around the world



Number 1, 2021

2021(令和3)年第1号・日本新使徒教会発行

〒206-0014 東京都多摩市乞田 1320 (本部) Tel. 042-374-0070

〒799-2468 愛媛県松山市小川甲 110 番地 17 Tel. & Fax. 089-994-3556

<http://www.nac-japan.org/>

日本小教区主任牧司：門平 彰弘 E-mail: [kadohira.nac@icloud.com](mailto:kadohira.nac@icloud.com)

監修：高島 健郎 / 編集担当：松岡 利恭



シャルル=アンドレ=ヴァン=ルー - <http://collections.lacma.org/node/246672> archive copy.  
パブリック・ドメイン, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=27299456> による

日本新使徒教会

■ 教理

3 くつろげる教会

■ nac. today

5 サクラメント (18) : 洗礼を八つの文に集約する

6 サクラメント (19) : 食べて、飲む—キリストは会衆の内に<sup>うち</sup>

7 サクラメント (20) : たった一言に盛りだくさん



# くつろげる教会

「イエス・キリストの福音に適う生活を送ることにより、イエス・キリストの再臨に備える教会。」これが教会の基本方針である、とシュナイダー主使徒は述べています。この教会の未来像は、幾度も教会生活に変化をもたらします。この記事では主使徒が、過去を振り返って、まだ着手されていない課題を指摘します。

私は、主使徒の叙任を受けた時に、自分にとっての課題は新使徒教会の未来像に集約される、という趣旨のことを申し上げました。私たちには「くつろぐことができ、聖霊に鼓舞され人々の神への愛に促されてイエス・キリストの福音に適う生活を送ることにより、キリストの再臨と永遠の生命に備える教会」という目標が掲げられています。この考え方を、私は以下のように敷衍したいと思います。

まず、一つの大事業を成し遂げてこられた私の先輩者に、改めて賛辞を送らせていただきたいと思います。歴代主使徒たちは、聖霊による鼓舞を受けて、私たちの悟りを深めそれを広げ、主がお委ねになった使命に教会がよりしっかり応えられるようにしてくださいました。

私の意図は、過去の批判ではなく、この歩みがいかに長かったかということに目を注いでいただくことです。最後の魂が御霊の証印を受けたらすぐに主がおいでになる、と教えていた時代がありました。準備するためには、御霊の証印を受け、信仰に忠実であり続け、この世に勝利しておくことが重要だ、とされていました。信仰に忠実であるためには、すべての礼拝に出席して献金を献げることが必須でした。「この世」という用語は、教会の外で起きているすべての物事を指していました。いわゆるこの世に勝利するためには、その外にあるすべての物事つまり新使徒教会以外のすべての物事から離れる必要がありました。ですから、一般的な意味における新使徒教会の使命、そしてとりわけ使徒の使命は、外部の世界により影響から信徒を守ることでした。そこで、礼拝には説教と職務執行に重きが置かれました。こうした背景を鑑みると、聖餐はそれほど注目されていませんでした。

## キリストの福音を伝える教会

こんにちにおいては、花嫁の準備という視点で、考え方が異なっています。罪や古いアダムの戦い、福音に適った生活、イエス様のようになることへの関心が強まっているのです。その結果、キリストの愛が完全であることの基準となりました。教会の使命は、こんにち掲げられているように、この成長を反映しています。始めに、すべての人々のところへ行って、

イエス・キリストの福音を伝え、 sacrament を施与します。さらに教会は、信徒が神様の愛と神様と人々に仕えることの喜びとを体験できる、心のこもった交わりを醸成します。典礼の成長はこれに呼応しています。すなわち、聖餐を執り行うことの重要性を増すことによって、信徒がキリストと信徒間との sacrament による交わりを、より一層密なものとするのが可能となったのです。

それでも、教会が自らの使命に従う前にすべきことがあるのは、教理要綱の中で、教会の持つ二つの側面が示されているからです。それは次の二つです。

- 一つ目に、教会は、人々が救いに近づけるようにすることを使命とする、神様によって建てられた組織です。
- それだけではなく、教会は神様を崇め、賛美するのです。

## 神を崇め、賛美する教会

二つ目、すなわち、教会は神様を崇め賛美する信徒の集まりである、と見なすことができますし、その見方を深めなければなりません。キリストの体ないしは神の民という公共的性格が教会にある、という認識を、もっと深める余地はまだあります。教会は、その全体において、公共的性格を持ったものとして神様にお仕えする必要があります。つまり、水と聖霊によって再び生まれた者たちは、使徒と同様に言動を通じて福音の証人となることで、使徒に委託されている職務を補佐することを召されているのです（教理要綱 7.1）。神様を崇めたり福音の生きた証しをしたりするのは教役者でなければいけない、ということではありません。これらは権限でなく義務です。



新使徒教会の未来像は、この公共的性格を明確にし、聖霊に鼓舞され神様への愛に促される、イエス・キリスト再臨への準備と、福音に適う生活とを謳っているのです。

このことから分かるのは、キリストの花嫁を調えるのに真の愛が決定的役割を果たす、ということです。ふさわしい働きがなければ、愛を認識することができません。信徒が主の再臨に備えられるようにするには、愛の業を行うための機会を、教会が信徒に与えなくてはなりません。神様や人々に仕えることの喜びを、信徒が体験できるようにしなければなりません。キリストの愛と隣人への奉仕は、信仰に忠実な者たちの集まりであるキリストの教会が義務として担っている奉仕です。キリストの教会が担うこの使命を、簡単に無視することはできません。教役者に命じられていることは、合理性の議論を超越しているからです。任命を受けた教役者は、本当に何から何まで配慮しなければならないのでしょうか。

キリストの愛を実践するのに、教役者でなければいけないわけではありません。教役者が関わらずにできることは、たくさんあります。

私たちの教会においては、慈善活動もおろそかにしてはいけません。教会外での慈善活動を、どの範囲までできるのでしょうか。貧しい人や苦しんでいる人の助けになることも、福音の実践です。この点において、私たちは常に頼れるの

でしょうか。人道支援への資金援助は素晴らしいことですが、それで十分でないことも確かです。他のキリスト教会派を模範とすべき、と申し上げているものではありません。私たちには手段もなければ必要な経験もないからです。他教派と張り合いたいとも思いません。まして慈善活動で名声を得たいとも思いません。私はただ、主がこの点についてどのようなことを私たちに期待されているのか、ということを知りたいのです。職務概念として定めることなのか、教会での活動として組織することなのか、今後検討すべき課題の一つとしなければなりません。私としては、他教派と交流するための機会と捉えています。神学上の問題を議論することも有益ですが、キリスト者が協力して善を行うことの方が、はるかに大切なのです…。



## まとめ

- 人類を救うことが、教会の務めです。使徒や使徒から権限を受けた教役者は、神様の言葉を宣教し、 sacrament を施与します。礼拝は会衆生活の中心です。
- 神様を賛美し崇めることも、教会の使命です。この使命は全教会員が担っている務めです。礼拝中、会衆は一堂に会して、司式者の語る祈りの言葉において、賛美と崇拝を表します。しかし、叙任を受けた教役者がいなくても、崇拝と賛美を表すことはできます。
- 花嫁は、主の再臨に備えるため、愛の業を実践しなければなりません。神様と隣人に仕える機会を信徒に与えることは、教会の使命です。この使命を教会が確実に実現できるための、可能な限り最善の方法を、私たちは考えなければなりません。

## サクラメント (18) : 洗礼を八つの文に集約する

洗礼——行為そのものは単純でありながら、意義深さと歴史の重みがあります。このシリーズではこれまで、洗礼だけを考察してきました。今回はそのまとめとして、洗礼について理解すべきことを、八つの文に集約しました。



洗礼の由来はダイビング——少なくともギリシア語ではそうなのです。キリスト教独自の産物であるこの洗礼(バプテスマ)は、バプテスマ(水浴び、洗う)が語源です。しかし新約聖書では、バプターよりも、水中に浸かることを意味するバプティゾーという語が好んで使われています。ただこのバプティゾーは、「沈む」「溺死」という言外の意味を含んでいるのです。

聖書は多くの意味を認めている。新約聖書には洗礼についての教えが、一つのまとまりとして展開しておらず、パズルに合わせるたくさんの小さなピースのように散らばっています。「キリストと共にある共通の運命」「もう一度生まれることによる<sup>あがな</sup>贖い」「聖霊という賜物を<sup>でまし</sup>据える土台」「交わりを許される」「最後の始まり」と表現しているのです。

状況の変化により生じた考え方の変化。洗礼が人々にどのような意味を具体的にもたらしてきたかということは、世の中の歴史と共に変化してきました。そして洗礼は、政治状況や社会的影響への対処を余儀なくなってきました。

洗礼の方法について、聖書にはほとんど記述がない。イエス様が洗礼を制定されたことははっきりしているものの、典礼としての詳細な記述はどこにもありません。ただし文脈の中で明らかなることもあります。洗礼には、施与者、水、三位一

体の神の名による式文、告白が必要、ということです。

大切なのは水量ではない。初期段階においては、様々な形態で洗礼が行われていました。遅くとも紀元200年になると、少なくとも三つの形態に絞られました。それが浸水(ペル・インメスィオネム)、<sup>かんすい</sup>灌水(ペル・インフズィオネム)、<sup>てきすい</sup>滴水(ペル・アスペルスィオネム)です。

幼児洗礼は規定のものでもなければタブーでもない。この点についても聖書では触れられておりません。またこの点についても、初期キリスト教の時から解決策が図られていました。幼児洗礼を認めるか否かは、洗礼に対する考え次第です。

時代と共に場所も変わる。ただ川に飛び込んだ時代もありました。あるいは受洗所で大きな行事として行われたり、病院で緊急措置として行われたりすることもあります。洗礼を執り行うべき場所について、様々な影響を受けてきました。

多様性が認められるためには、忍耐が必要。洗礼とは、一つであるキリストの教会に、信徒が組み込まれることです。しかし、諸教会が儀礼としての一般的水準を持てるようになり、他教派の洗礼を認められるようになるまで、長い時間を要しました。

(2020年9月15日 nac.today より)

## サクラメント (19)：食べて、飲む——キリストは会衆の内に<sup>うち</sup>

キリストの教会で行われるサクラメントを扱ったこのシリーズでは、これまで、洗礼について検証してきましたが、これからは、聖餐について詳しく考察します。新使徒教会はどのような立場をとっているのでしょうか。



洗礼と同様、聖餐もすべての教派で共通して執り行われているサクラメントです。このサクラメントは一度だけではなく、繰り返し施与されます。新使徒教会では礼拝ごとに執り行われますが、他教派では若干その頻度が少なくなります。聖餐に込められる内容は、教派によってかなり様々です。異なる教派の間で、こんにちに至るまで聖餐を共通に執行できない理由が、ここにあるのです。

### 制定されたのは主御自身である

「私は、キリストが完全に有効な犠牲としてただ一度捧げられ、断腸の苦しみを受けた末に死なれたことを記念して、キリスト御自身により聖餐が制定されたことを信じます。聖餐にふさわしく与ることにより、私たちの主であられるイエス・キリストとの交わりが築かれます。聖餐は、種入れぬパンとぶどう酒によって、執り行われます。このパンとぶどう酒は、必ず使徒から任職を受けた教役者が聖別して、これを施します。」新使徒教会のキリスト教徒は、この新使徒信条第七条を告白します。聖餐の内容と聖餐の持つ意義を、理性や教理という方法で完全に理解することはできません。実際、神様による救いの働きすべてに言えることです。聖餐は、イエス・キリストという人物に備わる秘義と、密接に関連しています。聖餐において、神様の実在と、神様による人類への深い愛情とを、直接に体験することができます。

聖餐については、ユーカリスト、主の晩餐、パンを裂くこと、といった呼び方がありますが(教理要綱 8.2.1)、いずれにしても、イエス・キリスト御自身が弟子たちを一堂に会して主の晩餐を制定された、という意味に変わりはありません。主は「私の記念としてこのように行いなさい」と仰せになり(教理要綱 8.2.5)、主御自身がなされた方法による聖餐執行の任務とその権限を使徒たちにお与えになりました。

### 聖餐という典礼

重要なことには準備が必要です。説教、罪の赦しに続いて、礼拝のクライマックスを迎えます。すなわち、会衆による聖餐の執行です。神様を崇める人にとって、荘厳で甚大な典礼です。内省と悔い改めを促す所感が述べられます。会衆一同は悔い改めの賛美歌を歌い、主の祈りを献げます。そして罪の赦しが宣言され、感謝の祈りが献げられます。

この後に、ごく短い時間が取られます。これは聖餐杯を視認できる形で開蓋するために用いられる時間です。これは可能な限りの静寂と威厳をもって執り行われます。比喩的な意味では、いと聖なるお方が啓示されます。すなわち聖餐のパンとぶどう酒が示されます。このことに、会衆はしっかり自覚をもって臨むべきです。

### 主の食卓が整う

牧司は祝福を示す意味で両手を広げ、聖餐杯の上に手をやり、聖別のための典礼文(教理要綱 8.2.16)を唱えます。「父、御子、御霊なる神の御名によって、聖餐のために、パンとぶどう酒を聖別いたします。そしてこのパンとぶどう酒にひとたび捧げられた、永久に有効なるイエス・キリストの犠牲を据えます。主はパンとぶどう酒を手にとられ、感謝を捧げてこう言われました『これはあなたがたのために与えられる、私の体、これは多くの人の罪の赦しのために流される私の血、新しい契約の血です。私を記念してこれを食べ(て)、飲みなさい。このパンを食べ、この杯を飲むごとに、主が来られる時まで、主の死を告げ知らせるのです。アーメン。』

この段階でイエス・キリストが会衆の内にお入りになります。牧司の言葉を通して、キリストの体と血がパンとぶどう酒と合体するのです。神様が実在されるのです!

聖別の言葉は、コリントの信徒への手紙一 11 章 24～26 節に書かれています。この中で使徒パウロはイエス様の言われたことを引用し、聖餐の本来の内容について述べています。パンとぶどう酒は、聖別を通して、一般の飲食物と区別されます。聖なる体が制定されることを口頭で宣言することにより、パンとぶどう酒という見える要素の中で、キリストの体と血という目に見えない実在が可能となります。その結果としてパンとぶどう酒の成分が変化するわけではありません。

もう一つ別の成分、つまりキリストの体と血の成分がパンとぶどう酒に合体するのです(両体共存<sup>りょうたいきょうぞん</sup>)。パンとぶどう酒という要素の成分に何の変化(化体<sup>かたい</sup>)もありません。

### 変化しなくても、単なる象徴ではない

様々な教派で意見を異にしている点が、まさにここなのです。成分の変化を賛美する教派もあれば、聖餐そのものを象徴としか見なさない教派もあります。新使徒教会は、パンとぶどう酒の成分は変化せず、単なる象徴としての典礼でもない、と考えます(教理要綱 8.2.12)。パンとぶどう酒は、キリストの体と血を単に象徴しているだけではありません。キリスト

の体と血が実在しているのです。聖別の言葉を通して、キリストの体と血の成分が、パンとぶどう酒の成分と合体するのです。この典礼を執り行うことによって、聖餐の外見(偶有性 [ぐうゆうせい=ある事物の本質的ではなく偶然的な性質。/広辞苑第七版])が変化するわけではありません。

こうして聖餐のパンとぶどう酒には、御子が必ず実在します。聖餐のパンとぶどう酒が受ける側に届くまでの間、御子は実在し続けます。聖餐は非常に重要なものですから、会衆はキリストへの敬意、信仰、献身の思いをもってこれに臨むべきです(教理要綱 8.2.17)。 (2020年9月29日 nac.today より)

## サクラメント (20) : たった一言に盛りだくさん

主の晩餐、聖餐式、聖体拝領、聖体機密など：これらは、聖餐を表す主な表現の一部です。しかしながら聖餐の意味として、これらの言葉は、聖書の中で全く見当たらず、別の言葉が使われています。今回は、聖餐を表す様々な表現とそれらの意味について考察します。



聖餐を表す表現として、よく見るのが「パンを裂く」(ギリシア語【クラシス・トウ・アルトウ】)という言葉です。もとは、ユダヤ人が食事を始める時の儀式を表す言葉でした。しかし、すでに新約の時代に、キリスト教徒の間で、イエス様が死の直前に制定されたサクラメントを指す言葉として使われるようになりました。何と言っても、イエス様がパンを切り分けられる様子は、エマオの弟子たちがそれを見てイエス様だと分かるくらい特徴的でした。「主の晩餐」(ギリシア語【クリアコン・デイプノン】)という表現は、パウロが書いたコリントの信徒への手紙に1カ所だけあります。この同じ書簡に「主の食卓」【トラペザ・キュリオウ】という表現もあります。主の食卓とは元々、交わりの食事のことで、最後に記念の儀式が行われました。のちにこの交わりの食事は、こんにちの礼拝から分離しました。

「主の晩餐」も「主の食卓」も、聖餐を表す表現としては一般的に受け入れられませんでした。しかし、この二つの言葉一とりわけ「晩餐」という表現一は、こんにちにおいても聖書にしっかり定着し用いられています。デイプノンというギリシア語は食事全般を意味するとはいえ、ぶどう酒が振る舞われたということは、ともかく祝祭の食事だったわけですから原則としてこの、食事は夜に行われました。特に福音書には、イエス様が処刑の前夜に弟子たちと一緒に座っておられたと書かれていますから、このことははっきりしています。

「主の晩餐」という表現がプロテスタントで伝統的に最も一般的に用いられた一方で、カトリック教会では「聖体拝領」という表現が一般的です。「聖体拝領」の英語訳であるユーカリストは、ギリシア語で「感謝」という意味です。福音書などで書かれているように、元々食事の始まりを表す言葉でした。それが紀元1世紀以降、典礼一般の執行を意味するようになりました。このユーカリストという言葉には、チャリス(恵み)というギリシア語が含まれており、このチャリスが今度はチャラ(喜び)というギリシア語と共通して用いられています。

「交わり」を表す英語の「コミュニオン」という言葉は、ギリシア語の【コイノニア】からラテン語の【コミュニオ】を経て

こんにちの言葉に移行してきました。「交わり」や「参加」を意味する言葉です。そして、この意味で、パウロは「主の晩餐」を「キリストの血の交わり」と「キリストの体の交わり」と述べています。こんにちでは、この語はおもに、聖餐においてウエハースなどを分配したり受け取ったりする部分を表します。

全く同じ聖書の節（一コリ 10:16）には、主の晩餐を表すまた別の言葉が出てきます。ここでパウロが言っているのは、祝福（エウロギア）です。しかし、神様から人ではなく、人から神様への祝福です。こんにちでは、特にパンとぶどう酒に対する

祈りを指します。この祈りにおいて、主を「祝福」する、すなわち主を賛美し、主の栄光をたたえるのです。

このことから明らかなように、イエス・キリストは聖餐を制定したときに、明確な言葉を残されませんでした。では、聖餐の形式、聖餐のもたらす効果、聖餐の持つ意義はどうなのでしょう？その答えには、びっくりすることが含まれていますが、それは次号「サクラメント (21)：イエスと弟子たちの食卓」で扱います。

(2020年10月15日 nac.today より)

明けましておめでとうございます。本年も「コミュニティ」をよろしくお願い致します。

今さら、ここで述べるまでもなく、昨年、世界中の人々は、非常に大きな試練を通されました。愛する方を亡くされた方におかれましては、心より哀悼の念を申し上げます。この病気に今まさに苦しんでいる方におかれましては、一日も早いご快癒を祈念致します。また、職を失われた方、その他多くの悲しみ、苦しみ、悩みにある方々におかれましては、何らかの糸口が見いだせることを、切に願い、祈るばかりです。

こうしたつらい状況の中で、私たちは新しい年を迎えました。どのような年になるかわかりませんが、私たち新使徒教会の宗教的指導者であるジャン＝ルーク・シュナイダー主使徒は「このパンデミックで、神様が救いの御計画を中止なさったり延期なさったりしたわけではない」と述べております。このことを私たちは信じます。明るい未来が保証されていることを信じます。悲しみの涙が、喜びの涙に変わることを信じます。神様がこの試みを克服させてくださることを信じます。そして、主イエス・キリストの再臨を信じます。

この「コミュニティ」は、こうした私たちの信仰を証しし、宣べ伝えるという趣旨で発行されています。主使徒の説教や、新使徒教会の教理、インターネットサイト nac.today のバックナンバーが掲載されています。実生活に関わる内容は少ないものの、イエス様から遣わされた使徒の教えを忠実に伝えています。また日本新使徒教会のホームページには、主使徒や教区使徒たちが世界中を伝道旅行する中で行う説教や教理に関する記事がUp-to-dateに更新されておりますので、下のQRコードなどを活用され、ぜひご覧ください。

末筆ながら、この一年が皆様にとって祝福された年となりますよう、心より祈念致します。

編集担当 松岡利恭



QRコード

スマホやタブレットでご活用ください。

左：日本新使徒教会ホームページ

右：YouTubeの礼拝リンク